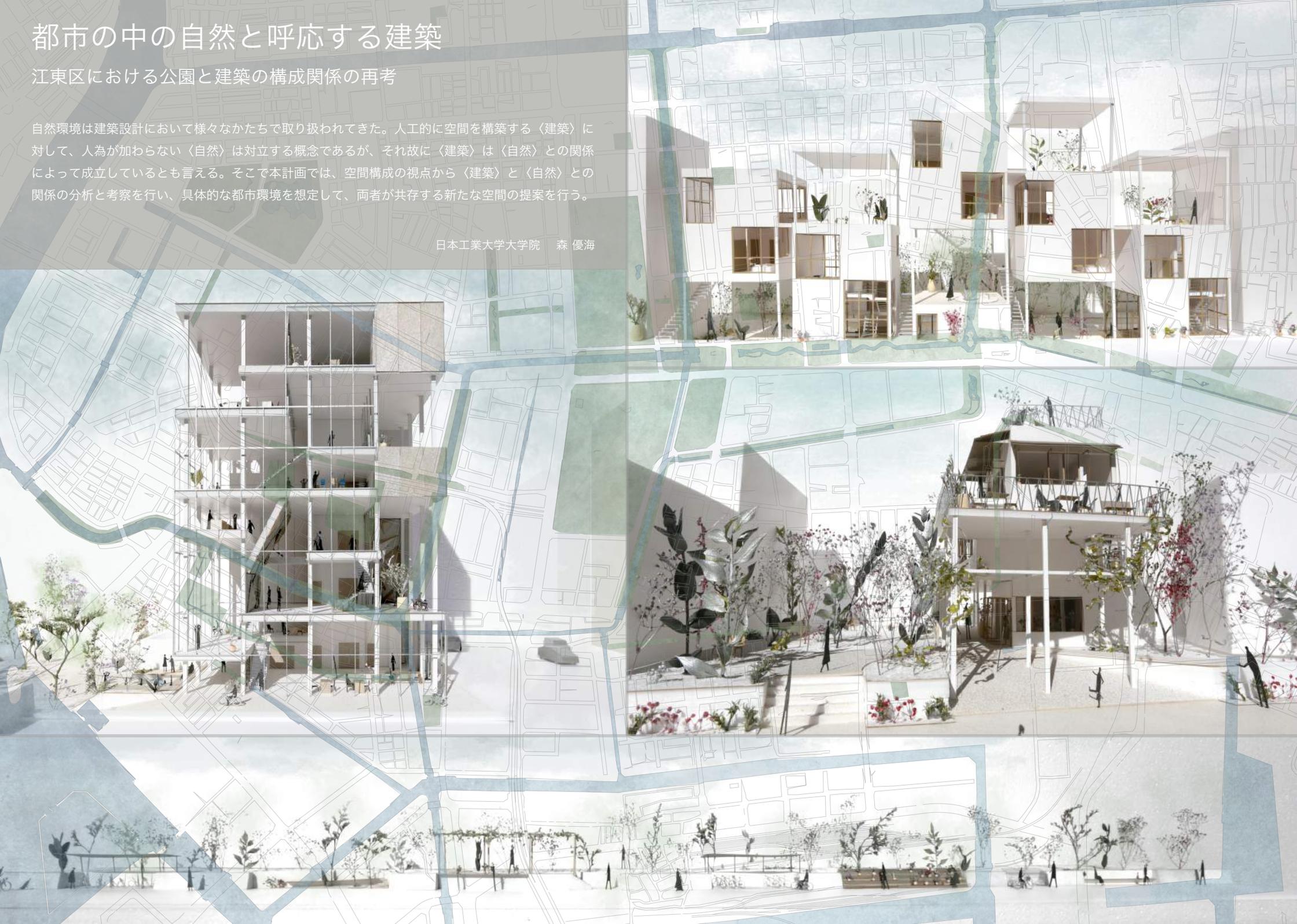


# 都市の中の自然と呼応する建築

## 江東区における公園と建築の構成関係の再考

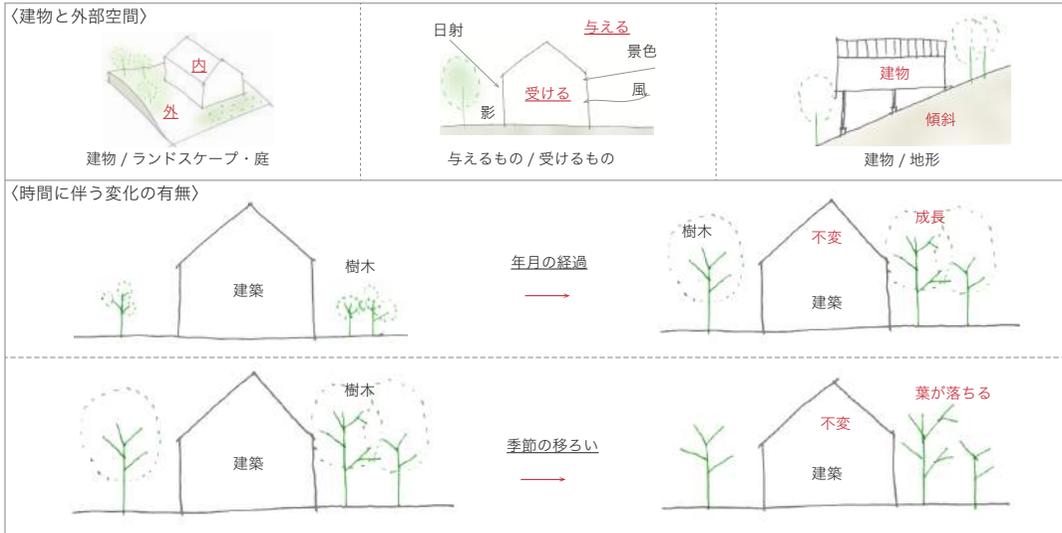
自然環境は建築設計において様々なかたちで取り扱われてきた。人工的に空間を構築する〈建築〉に対して、人為が加わらない〈自然〉は対立する概念であるが、それ故に〈建築〉は〈自然〉との関係によって成立しているとも言える。そこで本計画では、空間構成の視点から〈建築〉と〈自然〉との関係の分析と考察を行い、具体的な都市環境を想定して、両者が共存する新たな空間の提案を行う。

日本工業大学大学院 森 優海



## ■対立的な〈建築〉と〈自然〉の関係

建築と自然は様々な視点から対立した図式として捉えられ空間化されてきた。例えば内部空間をつくる建物に対して、自然は周辺環境、ランドスケープ、庭などの外部空間として対立的に位置づけられ、相互の配置関係が問題となる。またその外部空間は光・風などを与え、建物はそれを受ける関係にある。それらの自然現象のほか、樹木の成長、四季の風景の移ろいといった時間に伴って変化する自然に対して、建築は変化の少ない固定的な存在とも言える。これらのように建築/自然という関係は、内/外、図/地、固定/変化、新/旧といった対立的な図式を前提として空間化されてきたところがあると思われる。



## ■東京都江東区の自然環境

江東区は江戸時代から川を中心に発展してきた。元は河川の扇状地であったが、埋め立てと同時に水路が造られ、運河として活用された。使われなくなった運河は、河川として残っているものもあるが、多くは埋め立てられ、親水公園として生まれ変わっている。元々、運河だった公園の形状は細長く建物や道の間に直線的に存在している。その他にも清澄庭園や木場公園といった緑豊かな場所が区内に多数存在し、東京都の中では自然豊かな街と言える。



## ■〈建築〉と〈自然〉の新しい関係の図

建近年見られる建築と自然を連続的・一体的に考えられた建築作品について考察することで、建築が自然に依存したり、双方が対等に扱われるような構成関係を見いだした。



## ■江東区における公園と街の関係・敷地の選定



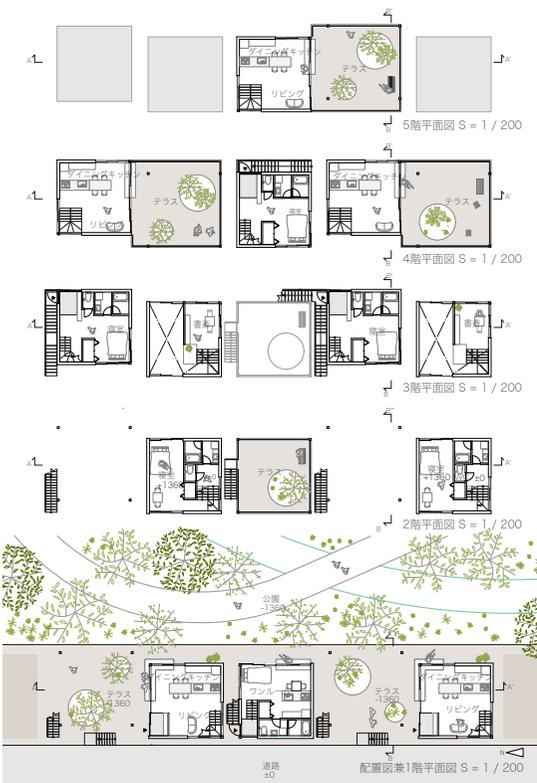
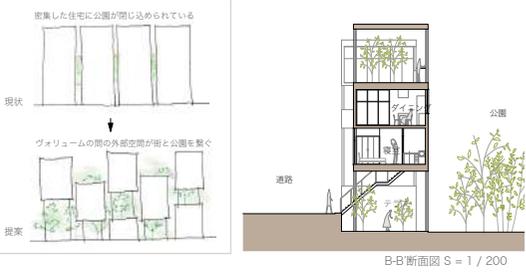
江東区内の公園・親水公園とその周辺の道と建物との関係について、地図および航空写真において配置関係を捉えた後、現地を訪れて境界部のづくりや、動線の関係、公園の使われ方を調査した。その結果を整理することで公園と周囲との関係を12のパターンに分類できた。

ここまでの分析に基づき、江東区内の公園に隣接した特徴的な敷地を4つ選定し、その場所に適した空間構成の手法を導き、建物の設計を行った。



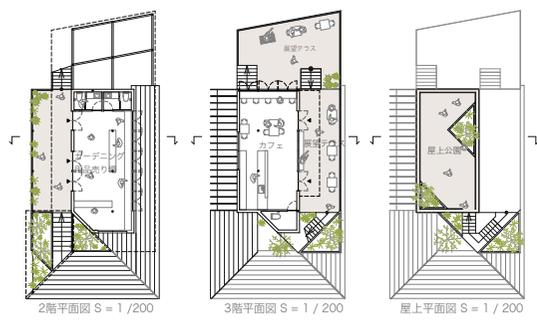
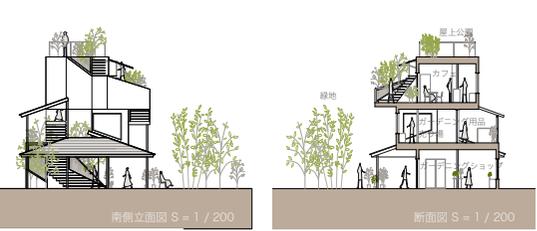
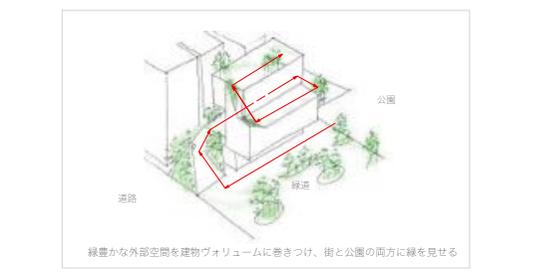
# Project A

公園に並行して家が建ち並ぶ住宅地で、複数の建物ボリュームを互い違いに浮かせることでできた外部空間によって、公園と街を繋ぐような役割を持った集合住宅の提案。



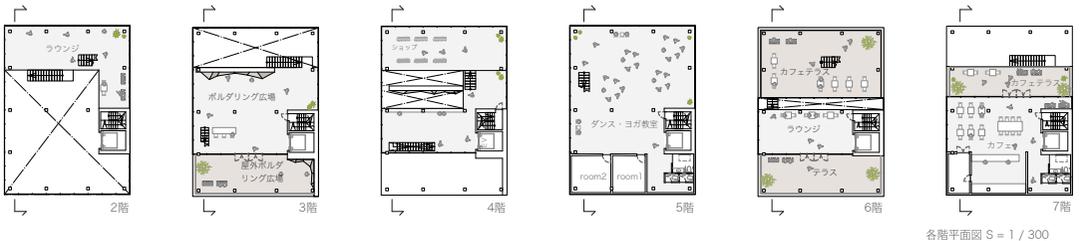
# Project B

緑の少ない公園に接する敷地で、螺旋状の緑豊かな外部空間を建物ボリュームに巻き付けることで、道と公園の両方に対して緑を開放したようなガーデニングショップを設計した。



# Project C

車通りが多く幅の広い道路と、静かな公園に挟まれた敷地で垂直方向に変化していく用途と空間的設えによって、水平方向に対立的な公園側と道路側の空間の性質を建物が受け入れるような設計を行った。



# Project D

緑道と街を隔てる擁壁がある場所で、近隣住民が緑道に対して日常的なふれ合いが展開される場所となるように、ベンチやプランターなどの設えを施した新たな擁壁の設計を行った。

